

丸山朱梨

春を贈る

春は

足音もなく近づいて来て
庭に芽吹いたふきという
足跡を残す

母は

その足跡をひとつずつ摘んで
自らの体内に
忘れていた春を巡らせてゆく

それだけでは満足できず
春のよろこびを

近所の親戚や中華屋にお裾分けする

受け取った人は

それぞれに配られた春を
どう調理しようかと胸を躍らせる

中華屋に出前を頼むと

注文の品と一緒に
ふきのとうの天ぷらを届けてくれた

人は春を贈り合って生きる